現代教育学部広報誌

2019年9月

EDUCATUS

Vol.1

中部大学

幼児教育学科　講師　山本 彩未　YAMAMOTO Saimi

専門分野：発育発達、運動生理学
研究テーマ：幼児の体力・運動能力、幼児の集団形成とコミュニケーションの発達、風雨環境で運動を実施した際の生理学的応答
授業科目：レクリエーション 実技/演習、幼児体育、保育内容（健康）、体育科研究、表現活動（身体）、幼児教育課題研究

幼児教育学科　教授　花井 忠征　HANAI Tadayuki

専門分野：体育学（発育発達学、測定評価学、幼児体育学）
研究テーマ：幼少児・発達障害児・低出生体重児の身体及び運動発達研究、体格・体力・生活習慣に関する研究、幼児の集団形成とコミュニケーションの発達、幼児教育環境のリスクマネジメント
授業科目：保育内容（健康）、保育内容研究（健康）、幼児体育、幼児教育課題研究、体育科研究

幼児のコミュニケーション・行動を可視化

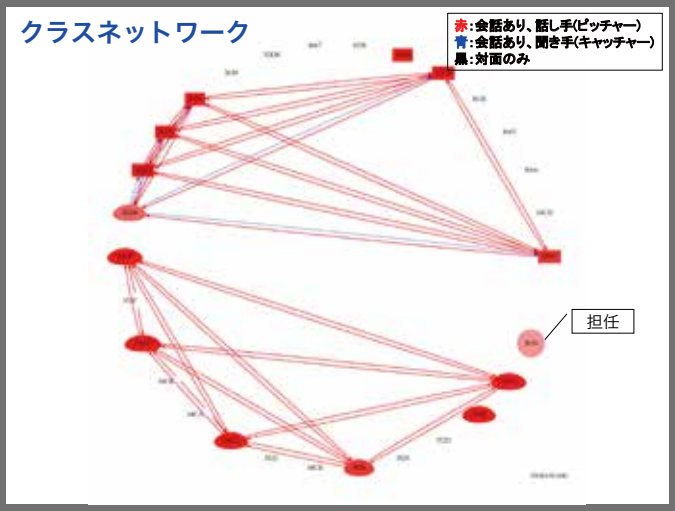
–“豊かな脳を育む遊び”をIoTで科学する–

幼児教育学科　山本 彩未　講師
幼児教育学科　花井 忠征　教授

実感の可視化

保育・教育の現場で「名札型ウェアラブルセンサー（日立製作所）」を活用することはできないか？と話を頂いたのが研究のはじまり。この名札型ウェアラブルセンサーは、歩行やパソコン作業時に生じる身体の小さなレベルの揺れを計測することができ、計測したデータを集約し、統計的な分布の特徴から組織の活性度を示すことができる。また、赤外線センサーによって、誰と誰が会っているのか、会話は一方的に話しているのか、聞いているのか、それとも、双方向の会話なのか、とコミュニケーションの様子を可視化できる（図1）。ふだん感覚的に理解していることが可視化されるだけでなく、そのデータによって組織が改善され、業績に反映されたことに魅力を感じた。

名札型ウェアラブルセンサー
（日立製作所）



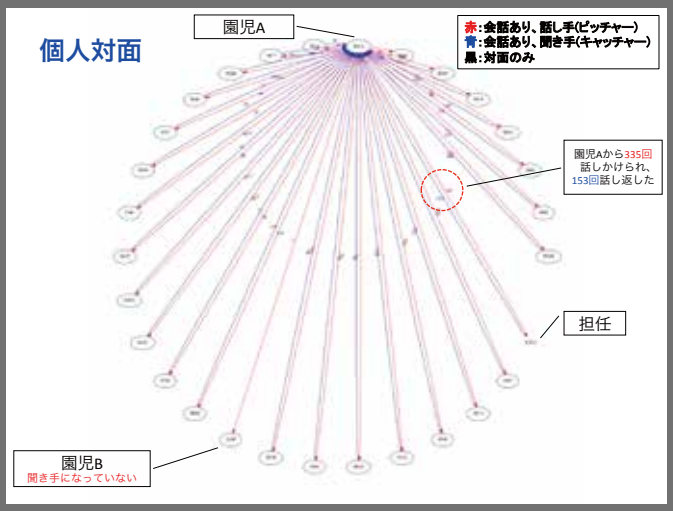
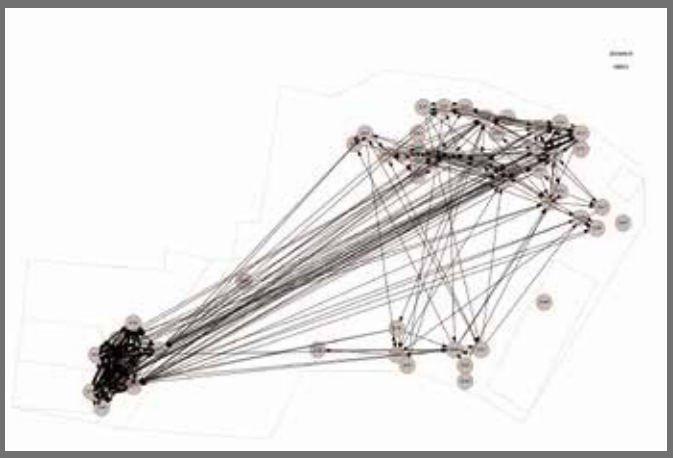
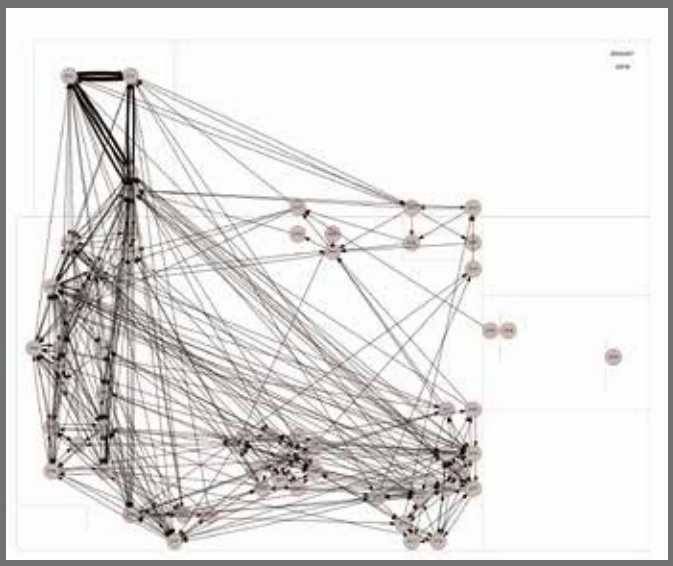


図1　対面ネットワーク図



行動軌跡



なぜ保育・教育の現場に？

幼児期は、いろいろな遊びを通して心身が育ち、幼児同士の関わり合いの中で協同性や社会性が培われる。遊びの中でも「外遊び」は、多くの動作を遊びから自然に身につけることができ、遊びが習慣化することにより運動機能や体力が向上する。しかしながら、近年、子ども達が身体を動かして遊ぶ機会は減少し、多様な動きの習得やコミュニケーションを構築する機会が限られてはいないだろうか。幼稚園や保育所における同年齢集団での生活体験は、こうした機会を経験する重要な場であり、他者との関係が大きく影響すると考える。そこで、幼児が園舎、園庭、固定遊具で遊びを展開する中で、「だれが」「だれと」「どのくらい」コミュニケーションをとりながら、どのように行動して集団形成と変容が繰り返されているのか、リアルタイムで評価し、特徴を掴むことを試みている。保育者の保育実践の実感を客観視することに貢献し、結果的に園児の自発的・主体的活動を支援する方法の一つになり得ればと考える。

また、行動変容と集団形成の変化が傷害の発生に関連しているか、変容する集団に特徴はあるのかという視点で傷害発生のメカニズムを解明していきたいとも考えている。幼児期は、身体諸機能の発達が著しく、自らがすすんで活発に体を動かすが、身体能力や危険予測能力が未熟であり、頭部が重いという幼児特有の体型的特徴があり、事故に遭遇しやすいと考えられる。「学校の管理下の災害［平成26年版］」（独立行政法人日本スポーツ振興センター発刊）によると、幼稚園では全国で22,605人、保育所で41,175人が骨折、捻挫、脱臼、挫傷・打撲などの負傷を負っており、骨折や重傷な障害は年々増加傾向にあることが報告されている。リスクとハザードの特定を実証することにより、全国の幼稚園・保育所の災害の減少に貢献できればと考える。

2014年にスタートした古くて新しい研究

幼児同士の交友関係やコミュニケーションの研究は、ビデオ観察や目視による間接的観察法によって多く検討されてきているが、設定された環境や限られた広さにおける検討やコミュニケーションの観察可能な側面に対する検討に限られていることが多く、客観性にかけるという課題があった。また、多人数の交友関係を分析するには時刻同期が必要となるが、観察法によって実施することは困難である。こういった問題点を解決することがわれわれの研究では可能と考える。

系統だったことを述べるには時期尚早な研究であるが、これまでの研究成果を一部紹介する。

1. 外遊び時間中の幼児の行動や集団形成の変化

コミュニケーションや交友状況が顕著に現れる、外遊び時間中の幼児の行動の変化と集団形成の変化について検討した結果、少人数の密なネットワークが外遊び時間の早い段階外から形成され、構成メンバーの大半は変わらず、密なコミュニケーションが継続していたことが明らかになった。このことから、興味や関心の“類似性”によって遊び相手を選択している可能性が考えられる。また、身体リズム、対面する人数、会話数、話しかける回数に性別による差はなく、身体リズムの高い幼児は対面人数が少なく、身体リズムの低い幼児ほど対面人数、会話数が多いことが明らかとなった。

2. 外遊び中のコミュニケーション状況と体力・運動能力との関連

幼稚園に通園している年中児の体力・運動能力測定項目（20m走、立ち幅跳び、反復横跳び、ケンケン跳び、懸垂、片足立ち、跳び越しくぐり）の結果を0.5歳区分でTスコア化し、上位から6名（上位群）と下位から6名（下位群）に分けて比較した。その結果、対面人数および身体リズムに有意な差なく、体力・運動能力の違いによるコミュニケーションの特徴はなかった。また、固定遊具・施設の使用（接触）回数に有意差はなく、使用した固定遊具・施設に異なる傾向があったことから、体力・運動能力の違いによって遊びの嗜好が異なる可能性が伺えた。固定遊具のリスク管理の検討については、年少児の結果から、滑り台は小集団で使用する傾向が高く、踊り場で密集することがないため、活発に動きながら活用している様子が把握できた。また複合型遊具の吊り橋部においても同様の傾向が見られ、両遊具とも使用者が少ない時の方が幼児の動きが活発なだけに、大集団で使用しているときよりも落下、転落等のリスクが潜んでいることを伺うことができた。

測定風景

現代教育学科　教授　深谷 圭助　FUKAYA Keisuke
専門分野：教育方法学、カリキュラム学、教育史学、教科教育学（社会・生活）
研究テーマ：自学主義教育の研究　教育技術に関する研究
授業科目：社会科教育法、社会科研究、生活科教育法、生活科研究

辞書引き学習

～語彙学習を科学する～

現代教育学科　深谷 圭助　教授

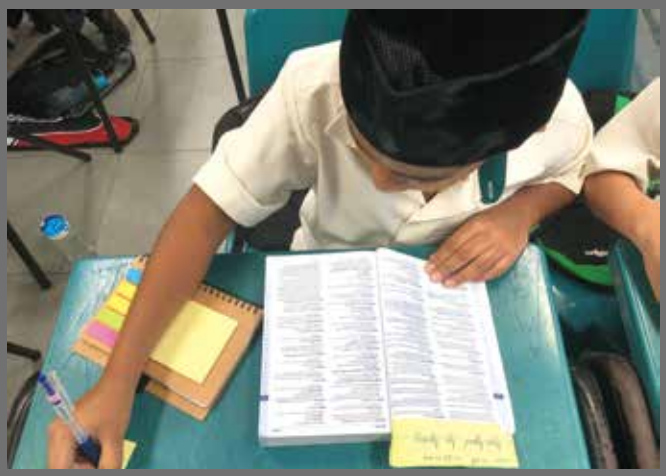
国語辞典使っていますか？

国語辞典、漢字辞典、英語（英和、和英）辞典を使用したことはありますか？

最近では、スマートフォンなどの端末で、言葉を検索して済ませてしまう人は多いのではないでしょうか。
辞書アプリ、あるいは電子辞書の専用機を使っている人もいるかもしれません。

私は、言語学習で重要な位置を占める語彙学習、辞書を使用した学習についての研究をしています。私は辞書を活用する学び方を身につけることの重要性を1994年以来、主張し続けています。また、現在では、小学生用学習国語辞典の編集の仕事をしています。小学生の学習者が適切に活用できるような辞典づくりに取り組んでいます。

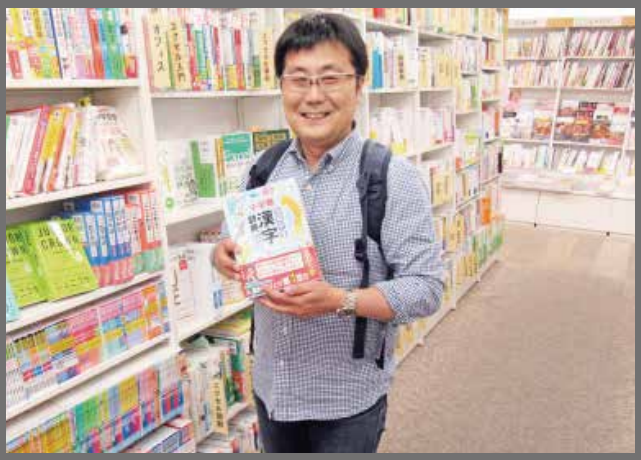
言うまでもなく、言語を獲得することは人間にとって重要なことです。教育の大部分は言語を獲得することといって過言ではありません。人間が人間らしく思考できるのは、「言語」があるからであり、人間が高度なコミュニケーションを相互に行うことができるのは、「言語」があるからなのです。「言語」を習得するためには、膨大な量の語彙を学習する



必要があります。また、それらの語彙に含まれている様々な意味や用例、表記、発音を身につけることが求められます。これらの内容を学習するためには、義務教育だけでは十分ではありません。義務教育で学習する漢字や国語テキストの内容だけでは不十分なのです。従って、生涯にわたって言語を学び続けることが必要であり、言語、語彙を学び続ける態度や習慣が重要なのです。

こうした背景のもと、日本では、戦後、1947年の小学校学習指導要領試案の公示以来、日本の小学校で、辞典の引き方を学習することになりました。現在まで、辞書の引き方を教える指導は継続して行われてきています。1947年学習指導要領試案では、小学校4年生で、後に小学校4, 5, 6年生で辞典指導は行われることが定められました。アメリカ言語教育学者輿水実がその辞典指導の系統をアメリカのコースオブスタディ、ヴァージニア・プランを参考に定めたと考えられています。小学校4年生で辞書の使い方を教え、小学校5年生で辞書を使用させ、小学校6年生で辞書を活用させるという「指導の系統」が定められました。現在は、小学校3、4年生で指導することになっており、実際には、小学校3年生で国語辞典、小学校4年生で漢字辞典を教えることになっています。

辞書は、語彙を学ぶための重要な教材なのですが、日本の学校教育は、辞書を使用しなくても教材で学ぶことができるように作られています。かつて、辞書がなければ読んだり、文章や言葉を解釈したりことが難しかった教科書に、言葉の意味や使い方の解説が付記されるようになり、辞書の指導が、辞書の構造、言葉の並び方、辞書を使用することの目標を教えるというものに矮小化されてしまいました。



語彙を学ぶ主体を形成するために、私は1990年代に「辞書引き学習法」を開発しました。

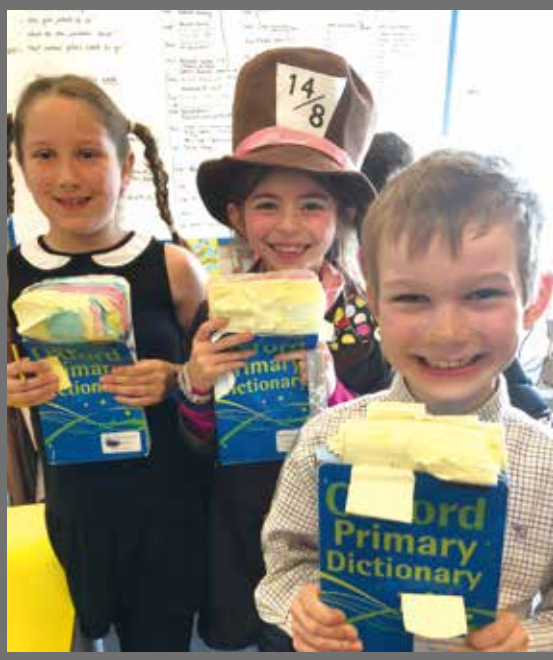
この学習法は、従来の辞書指導とは異なるアプローチをします。そして、辞書を活用するという点において、これまでにはない画期的な辞書活用の仕方を子供たちがみせてくれます。

紙の辞書とネット辞書

1990年代からインターネットが急速に普及し、2010年代にはスマートフォンという小型情報端末を誰もが手にするようになりました。これらの環境の変化で、人々のコミュニケーションの在り方が大きく変わり、言語をめぐる状況も大きく変化しました。だれでも公にSNS等を通じて気軽に発信できるようになりました。このことに伴い、「ことばの揺れ」が大きくなりました。言葉の使い方の間違いも含め、新しい言葉の使われ方が次々に為されるようになりました。

インターネットの辞書は、作り手の側からは、新しい言葉の使われ方に対して対応することが容易で、コストも少なくて済むこと、広がりをみせています。また、使う側も、簡単に言葉を入力することで語釈や例文を調べられるので便利です。

しかしながら、教育的見地からすれば、簡単に調べられるからといって、語彙を理解したり、定着したりすることにはなりません。大切なのは、紙が使いやすいか、ネットが使いやすいか、あるいは紙が低コストなのか、ネットが低コストなのかではなく、学習者の諸能力が向上するのかという点を考えなければならないのです。その意味において、紙の辞書を活用した辞書引き学習は伝統的な方法と考えられます。しかし、このメソッドにおける辞書の活用の仕方は斬新で、まさに「コロンブスの卵」。シンガポールの教育関係者からは、”Simple, but powerful”と評価されています。



「辞書引き学習」の導入とその成果

辞書引き学習とは、「調べたい言葉があったら辞書で引く」という従来の辞書指導の範囲に留まらず、「辞書を読んで既知の言葉を探すこと」を児童・生徒に行わせます。あえて、知っている言葉を辞書から見つけ出させて、その言葉を読ませることで、辞書を引くきっかけを与えるのです。

この手法は、言葉を扱う作家やライター、あるいは辞書愛好家が日常的に行っていたことなのですが、辞書をひくきっかけを、辞書自体を読み物として与えることで、辞書を引くだけではなく、読むことから、言葉を調べたいという意欲を引き出します。

そして、辞書を読むことをすすめるために、付箋紙に通し番号と見つけた言葉を書き込ませながら、自分の頭の中にある言葉を意識させるようにします。自分の頭の中にある見えない言葉を付箋に書き出すことによって「見える化」するのです。この学習方法は、言語や国や地域にかかわらず、語彙学習をより活動的に展開する方法として導入することが可能です。

現在、日本、イギリス、シンガポールでこの学習法は実践されています。イランでも広くこの方法は紹介されています。

この学習方法は、大きな成果を上げています。国際学会で継続的にこの研究成果については発表しています。

知的発見の喜びを目指して「なるほど！子どもアカデミー」

現代教育学科　講師
伊藤 大幸　ITO Hiroyuki

現代教育学科の課外活動「なるほど！子どもアカデミー」では、春日井市教育委員会と連携して、春日井市内の小学校10校で「土曜チャレンジアップ教室」を開催しています。本学科の１・２年生が、小学校４～６年生を対象に、実験や制作を通して「なるほど！」という知的発見のある楽しい学びを提供する社会貢献活動です。昨今、子どもの理科離れや学習意欲の低下が指摘される中で、理科教育を重視した本学科の特性を活かし、地域の子どもたちに知的発見の喜びを知ってもらうことが、この活動の第一の狙いです。

第二の目的として、「子どもアカデミー」は現代教育学科の学生の「プレ教育実習」としての役割を併せ持っています。本学科では、３年次に小学校または中学校での教育実習に臨みますが、「子どもアカデミー」では、その前の１・２年次の段階で現場を経験する機会が得られます。本当に「おもしろい」授業とはどういうものか、どうすればそれを実践できるのか、仲間とともに考え、話し合い、答えを出していくプロセスが、学生たち自身にも大きな知的発見をもたらします。

こうした教員養成の文脈における「子どもアカデミー」の教育効果は、学術的な観点からも重要な意味を持ちます。１・２年次の段階で現場経験を積むことは、それ自体が教育力の向上に直接つながるだけでなく、自分が教員になるために大学で何を学び、身に着けるべきなのかという学習観の深化をもたらすでしょう。こうした学習観の深化は、大学の正規の授業科目での学びをより深く、実りあるものにし、それがまた再帰的に活動での実践の質を高めると考えられます。このように活動によって得られる「経験知」と大学の講義で得られる「形式知」が学生の実践的教育力にどのような相乗効果をもたらすのかを検証することで、学術的なレベルでの知的発見を実現することが、「子どもアカデミー」の第三の目的です。

「あつまれ!!わんぱく隊」

幼児教育学科　准教授
采睪 真澄　WAKEBIKI Masumi

保育者・教育者になるためには何を学べばよいのでしょうか。子どもに関する知識？　保育や授業をするための技術？　もちろんそれらも必要ですが、一番重要なことは、「子ども一人ひとりを理解し、それぞれの成長を見通した関わりをし、子どもたちが未来を切り開く姿勢を育んでいく力」です。この力を、私たちは保育・教育実践力と呼んでいます。

この実践力を学生が身に着けるために、中部大学では現代教育学部創設と同時に、保育・教育ボランティア「あつまれ!!わんぱく隊」を立ち上げました。活動の理念は、「学生自ら主体的に学ぶ」「子どもと実際に関わりながら学ぶ」の二つです。

現在「わんぱく隊」は、自然体験、運動遊び、環境教育の３つグループに分かれ、それぞれのテーマを基に子どもたちと活動に取り組んでいます。どのグループも学生が自主自律で運営していますが、特にわんぱく隊ならではの特徴として、「保幼小の連携」「発達支援への取り組み」「春日井市を始めとした地域社会との連携」が挙げられ、これらの経験は学生の大きな自信へとつながっています。

現在では、わんぱく隊で磨いた実践力を基に、多くの卒業生が保育・教育の現場で活躍しており、その卒業生からも、「わんぱく隊での経験が現場での実践に役立っている」との意見が多く寄せられています。

卒業後もリカレント教育でサポートしていく
「幼児教育セミナー」

幼児教育学科　教授
武藤 久枝　MUTO Hisae

保育・幼児教育を取り巻く子育て環境が変化している現代において、保育士、幼稚園教諭などの保育者がその専門性を磨くためには現職になっても学び続けるリカレント教育が大切です。幼児教育セミナーは中部大学幼児教育学科の卒業生および春日井市近隣の保育者を対象に、そのリカレント教育の場を提供することを目的として2011年より始まりました。

１年に１回開催の幼児教育セミナーでは学科の教員が交代で講師を務めています。内容は保育・幼児教育に関する講演と演習です。講演では保育・幼児教育に関する動向、最近の国の基準や方針、対応などを紹介しています。演習では現代の子ども達に合わせた手遊び、ゲーム、手作り玩具などを取り上げています。現場ですぐ役に立つ内容と保育者としての精神的バックボーンになる内容とを提供することを大学の使命として心がけています。

近年は大学祭に合わせた開催にしているため保育者や卒業生が参加しやすく、子ども連れの参加もあります。時にはOB教員の参加もあるので、いわば学科の同窓会であり、情報交換や結婚・出産などの近況を話す場にもなっています。タイムスリップしながら私たち教員が教育を振り返る機会でもありますが、卒業生からの相談があった時には就職委員の教員が求人を紹介等してサポートする機会にもなっています。

また、別のリカレント教育として年に１～２回開催の保育実践研究会も主催しています。ここでは学部学生もゼミ指導教員とともに出席して、現場での課題や実践の雰囲気を味わっています。

幼児教育セミナーはささやかな規模ですが、保育・幼児教育に関する情報を地域へ提供しています。そして、保育者となった卒業生を卒業後もサポートしていきます。

音楽担当教員による演習「音楽的要素を見通した表現遊び」では、音楽から感じることを身体の動きにする表現技術を学びます。

～教師の力量育成プロジェクト～
「中部教育実践研究会」

現代教育学科　准教授
橋本 美彦　HASHIMOTO Yoshihiko

1　研究会の目的

地域の小・中学校の現職教員（本学卒業生を含む）や本大学・他大学教育系大学生、その他教育関係者を対象に開催しています。子ども達が「応答し合う」関係（うなずき合い、「わからない」を出し合い、問答し合う学習集団）に育て、子ども達が「主体的・対話的で深い学び」に向かう学級づくりと授業づくりの手だてを学びます。研究会では現場の先生方の学級づくりを基にした授業実践を提案していただき、大学では学べない現場で明日から実践できる学級づくりと授業づくりについて学んでいます。また、参加者が学び続ける教員となり、学級づくりと授業づくりの力量を高める努力をする教員に育てることが本研究会の目的です。

2　研究会開催日・会場

2019年度の定例会は、（第1回：4月20日、第2回：5月25日、第3回：6月15日（開催済み）、第4回：9月7日、第5回：10月5日、第6回：11月9日、第7回：12月21日、第8回：2月1日、第9回：2月29日、第10回：3月28日、すべて土曜日）を中部大学名古屋キャンパス500室（第10回は中部大学春日井キャンパス）で開催します。

3　今年度のテーマ

「子どもが学習の主体となる授業づくりと学級づくり」です。平成31年度は「かかわり合い、学び合う民主的な学級づくりと授業づくり」と題して、学級づくりと授業づくりの具体的方法を実践事例【教材研究（教材解釈と発問づくり）の話し合い・授業提案DVD視聴、研究協議）を通して学びます。また、豊田ひさき先生（朝日大学教授）のミニ講義（主体的・対話的な深い学びの授業づくり―東井義雄子どものつまずきは教師のつまずき―）も行います。

次号から実際の研究会の様子や参加者の声をお伝えします。

誰でも、誰とでも、いつでも、どこでも楽しく

【レクレーション実技／3年春学期】

― 幼児教育学科　山本 彩未　講師

1.授業内容

本科目は、レクリエーションインストラクター（日本レクリエーション協会）取得に必要な科目の一つで、幼児教育学科と現代教育学科共通で開講されています。授業では、スポーツレクリエーション、室内レクリエーション、キャンプレクリエーション、歌、ダンスなど、さまざまなレクリエーション活動を実施します。自らがレクリエーション活動を楽しみ、活動を通して、「誰でも、誰とでも、いつでも、どこでも楽しく」できるように工夫し、対象者やねらいにあわせた支援・指導、提供をする方法を学んでいきます。さらに、レクリエーション活動に慣れた頃には、対象者に合わせた活動を展開してくための実践的な能力を高めていきます。具体的には、20分程度のプログラムを各自で企画し、受講者の前で一人ずつ発表、受講者全員で講評しあいます。年度によっては、個人だけでなく、グループで30～40分間のレクリエーションを企画し発表しています。

2.授業の様子・学生の変化

毎年、私からの問いかけに対しても遠慮がちな状況からスタートします。初回授業は無表情に近い人たちもいますし、学生同士なかなか会話が続かず、ぎこちない状況も多々あります。コミュニケーションが得意な人や人前にたつことが得意な人が受講しているわけではなく、むしろ、人前にたつことを苦手とした人が多く受講しています。経験のない人にとっては、人前に立つだけでもかなりの緊張が走りますし、リーダーとなり、集団を動かすということはとてもハードルの高いことだと思います。また、他人から講評されるということに苦手意識をもつ人は多いのではないでしょうか。それが半期経ち、授業が終了する頃には、個人差はありますが、みごとに表情豊かな様子に変わっています。講評についても、回を重ねるごとに発言する人がふえ、発表者のなかには「自身の発表がどうであったか、コメントが欲しい！」と口にする人も多くいます。こうした変化は、おそらく、たくさんのレクリエーション活動を通してコミュニケーションが

促進されたこと、自分で準備した企画を一人で実施して集団を動かした自信、その緊張する時間を受講者全員で何度も共有するためではないかと考えています。

3.授業の記録

毎年、受講者が作成する「レクリエーションノート」があります。授業の記録をするのではなく、『見返したくなるように記述し、将来の自分へのプレゼントになるようなノートの作成』を課題にしています。半期の授業を通して、50以上のレクリエーション活動を体験しますが、授業中、ペンをもってメモをすることは一切しません。授業中は、レクリエーションゲームに全力でとりくみます。そのため、毎回の授業で展開されたゲームは頭で記憶し、授業後に各自で記録します。またノートには毎回、必ずコメントを添えて記録するように指導しています。

将来、就職をした際に、学生時代をふと思い出しながら、レクリエーション実技での学びを活かしてほしいと願いをこめて、取り組みをすすめています。

同窓生から ～活躍する先輩～

「先生、空はどうして　青いの？」と子どもに聞かれたら、あなたはどう答えますか？

小学校教員
名古屋市立旗屋小　北　亮介
（現代教育学科 ※旧児童教育学科 2012年3月卒業）

これは、私が中部大学現代教育学部の面接試験で聞かれた質問です。当時、高校生だった私は「『それは○○だからだよ。』と、子どもたちの疑問に即座に答え、理由を明確に説明します！」と答えました。「それではアカンのや！」と、面接官の豊田先生に、その場でご指導を頂いたことを今でも鮮明に覚えています。

「頭が良く、何でも知っている先生」が理想の教師像だった私に、現代教育学部の先生方は「教師とは何か」を1から教えてくださいました。私が悩んでいるときには、親身になって話を聞いてくださり、嬉しいことがあったときには、自分のことのように喜んでくださいました。家族のように温かく、優しく包み込んでくださる先生方の下で学ぶことができた私は、本当に幸せ者です。

「先生、空はどうして　青いの？」と子どもに聞かれたら、あなたはどう答えますか？
今の私なら、こう答えます。

「『なんでだろう…先生と一緒に考えてみようか』と、子どもの目線に立ち、寄り添いながら共に考えます！」と。私の理想の教師像は「頭が良く、何でも知っている先生」から、現代教育学部の先生方のような「子どもに寄り添い、共に学び、支えられる先生」へと変わりました。

教師という職に就き、今年で7年。私は、この７年で色々な子どもたちと出会いました。どんな言葉を掛けるべきか･･･どうすれば子どもに寄り添え、支えられるのか…自分の思いばかりが先走り、空回りをして何度も失敗をしました。上手くいかないこともたくさんありましたが、子どもたちから「なるほど！分かった！」「先生、ありがとう！」などの言葉をもらうと「教師になって良かったな」と心から思います。理想の教師になるには、まだまだ時間が掛かりますが、現代教育学部の先生方にしていただいたことを忘れず、「子どもに寄り添い、共に学び、支えられる先生」を目指し、これからも努力を続けていきたいと思います。

「子育てすくすく育て隊」での経験が今の仕事にも活きています。

公務員保育士
北名古屋市職員（保育士）　岩澤　采佳
（幼児教育学科 2015年3月卒業）

私は中部大学卒業後、公務員保育士をしています。保育士は一人一人の小さな大切な命を預かる責任のある仕事です。仕事をしていくにあたって、保護者とともに子どもの成長を喜び合い支援していくことを大切にしています。

私は、中部大学で『子育てすくすく育て隊』に所属しており、この経験が今の仕事に非常に活かされています。『中部大学子育てすくすく育て隊』とは、子育て支援ボランティアです。地域の子育て支援センターで親子遊びを提供したり、子ども向けのイベントでレクリエーションを行ったりし、私は実際に子育てをしている保護者の方々や子どもと触れ合う機会を多くもつことができました。育児中は喜びばかりではなく、不安を感じる保護者の方もいて、子どもの成長を伝え保護者の方と連携をとっていくことはとても大切だと学ぶことができました。この経験を活かして今の仕事においても私は、「今日はこんな活動に興味を示していましたよ。お家でもぜひやってみてください。」などと保育所と家庭をつなぐコミュニケーションを心がけています。大学の講義では、自分の知識やスキルを磨くことはできましたが、この『中部大学子育てすくすく育て隊』ではより保育の仕事に近い経験をすることができ保護者への配慮の仕方や子どもの成長に気づく力を身につけることができました。

保育士は子ども達が成長していく姿を近くで見ることができるやりがいのある素敵な仕事です。中部大学では、学生のうちから座学だけではなく保育現場に近い経験をすることができます。中部大学から一人でも多くの保育士が未来ある子ども達のために働けるよう心から願っています。

2019年度現代教育学部行事予定

9月

7日（土）	第4回中部教育実践研究会
21日（土）	後期授業開始日

10月

5日（土）	オープンキャンパス
5日（土）	第5回中部教育実践研究会
19日（土）	第4回あつまれわんぱく隊
30日（水）	現代教育学研究所講演会 ※講師：内田良 名古屋大学大学院准教授

11月

2日（土）～4日（月）	大学祭
3日（日）	幼児教育セミナー
9日（土）	第6回中部教育実践研究会
13日（水）	卒業研究作品・実技発表会
16日（土）	後援会「父母との集い」　大学会場
21日（木）	学園創立80周年記念式典
23日（土）	第5回あつまれわんぱく隊

12月

14日（土）	第6回あつまれわんぱく隊
21日（土）	第7回中部教育実践研究会

1月

25日（土）	卒業研究発表会

2月

1日（土）	第8回中部教育実践研究会
29日（土）	第9回中部教育実践研究会

3月

23日（月）	学位記授与式
28日（土）	第10回中部教育実践研究会

「EDUCATUS]創刊にあたって

現代教育学部　学部長
佐野 充

広報誌「EDUCATUS」は中部大学現代教育学部を広く社会に理解してもらい、社会とのコミュニケーションを深めることを目的に発行します。現代教育学部の現在の姿を、教育、研究、学生・教員の活動、将来像など、様々な角度から光をあてて紹介します。

なお、「EDUCATUS」は、「EDUCATE」の語源となったラテン語で、「E」は「外へ」を意味する接頭語で、「DUCERE」は「能力を導き出す、引き出す」という意味で、人間の可能性を外からの働きかけによって引き出すことを意味します。

～ 表紙の作品について ～

幼児教育学科　采澤 真澄　准教授
（幼児の造形表現 担当）

Star Fragment

（Silver950　ロストワックス鋳造　第55回日本クラフト展出品作品）

5年程前、当時小学校の理科で星の勉強をしていた娘と流星群を見た。彼女は隕石という言葉をはじめて授業で知ったらしく、それを得意げに私に話してくれた。そして、夢中になって流れ星に願いを唱えていた。現実とファンタジー、二つの価値観を行き来する子どもらしいその姿がとても微笑ましく、今でも印象に残っている。夜空に一筋の光の軌跡を描くその石ころに、彼女はいったいどんな色や形をイメージしていたのだろうか。そんなことを考えながら、締め切り迫ったある日の夜中に、このStar Fragmentを作った。

編集・発行
中部大学現代教育学部 広報委員会
〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
TEL 0568-51-4690　FAX 0568-51-4699
E-mail　educa@office.chubu.ac.jp